



近年、「子どもが弱くなった。」、あるいは、「最近の子どもはおもいやりがない。」「などと良くない話を耳にします。子どもたちは、悪くなっているのでしょうか。」

近ごろの子どもたちを見ていて、いくつかの特徴に気がきました。
・我慢ができない。
・論理的に考えようとしれない。
・自己主張が強かったり、逆に、できなかったりする。
・就寝時刻が遅い。
・嫌いな食べ物を食べる努力をしない。などです。

自分のいけないところを分かっているのに、直す努力をしない子どもたちがいます。そのような子どもたちの家族の方と話をしてみました。その結果、就寝時刻が遅い子どもの家庭では、家族全員が就寝時刻が遅いこと、嫌いなものは食べようとしない子どもの家庭では、食べないことを当然のこととしていることが判りました。また、自己主張が強すぎたり、逆に、できなかったりする子どもの家庭では、親が子ども

もの言いなりで反論できなかったり、反対に言い過ぎて、子どもが静かに考えたり、話したりする余地がない状況もありました。

家族の価値観や行動倫理は子どもの人格形成にどんな影響を与えるか、子どもの望ましい人間形成のために家庭はどうあつたら良いでしょう。

子どもたちが、心底安心して心を開くことができる相手が家族であり、さらに、生活の知恵に始まり、世の中の仕組みや人間の心、善悪などを、しみじみと身に染みるように説いたり、一緒に考えたりすることができるようになるのも家庭の良さです。

過日、『親子の関係を考える』講演を拝聴させていただきましたが、家族の話の中に祖父母の話が全く語られませんでした。不思議に思い、講師の先生に尋ねたところ『祖父母と同居していれば、昔からの知恵や地域とのつながりがわかり、嫁や姑などの人間関係の複雑な絡みの中からも、たくさんのことを学び、子育てに役立てられる。』ということとです。しかし、昨今は核家族が多く、講演ではそこまで踏み込めないということでした。



今や、家族の在り方が多様化し、より良い家族の在り方が分かりにくい時代に来ています。現実、子どもが変わったのではなく、家族スタイルに始まり、社会全体が変わってきたのです。しかし、「世の中に通じる生き方や考え方を家族は持っているはずで。それらを伝えることで子どもは豊かに育ちます。将来、社会生活を営むうえで、必ず役に立ちます。強く、正しく、他と協調して生きられるよう、いたずらに猫可愛がりでなく共感しながらも、厳しく導いていくことが真の意味の「家族の優しさ」です。子どもは家族から生きる力を学んでいます。」

早寝・早起き・朝ごはん運動の提唱

『食卓の求心力が、社会を変える』をキャッチフレーズに、食育基本法の施行に伴って、食育の必要性に関わる取り組みがとみに盛んになり、様々な分野での催し、関連図書も事欠かないほどで多種多様に出回っています。青少年育成都留市民会議でも、『今、なぜ食育か』を問うフォーラム(平成十八年七月五日実施)を開催し「早寝・早起き・朝ごはん運動」を推し進めています。朝食抜きは、子どもの成長、脳、性格の発達に悪影響を及ぼすことは、既

に確かな統計によって裏付けされていますが、特に、子どもたちの食行動の管理は、大人がすべきであり、子どもたちに自分勝手な食習慣をつけてしまうと、身体だけでなく心の発達にも歪みを生じかねません。

逆に「朝食の効用」について、多くの専門家が力説されています。そこで、朝食を必ず摂れる環境を周囲の大人が整えることが必須となります。例えば、朝食をおいしく食べさせるために、夜食は与えないとか、朝食に魅力を感じさせる雰囲気づくりなどに心がけるとか、何より「朝食には、特別の意味がある」ことを家族揃って意識することが必要です。

日頃の生活の中で、特別な行事の日の朝、運動会やスポーツの試合の日、試験に挑む日などの朝食は、消化時間を考えたり、脳の働きを考慮した献立を必ず用意します。その心がけを日常化するべきでしょう。

人の身体は朝目覚め、脳も身体も朝食により大切な栄養補給をしなければならぬことを再認識したいものです。

(次号に続く)

